BOOK GUIDE
今月のブックガイド

**おひとりさま vs.
ひとりの哲学**

山折哲雄・上野千鶴子【著】
朝日新聞出版
定価 760 円＋税

「ひとり」の覚悟か美学か妄想か

「おひとりさまの老後」(2007)、「男おひとりさま道」(2009)、「おひとりさまの最期」(2015) の“おひとりさま三部作”で、社会の“ひとりはさみしい、家族に看取られないのは孤独死”という価値観を喝破した上野千鶴子氏と、「ひとり達人のススメ」(2013)、「『ひとり』の哲学』(2016) が男性読者に支持されている (と上野氏が推測する) 僧侶で宗教学者の山折哲雄氏による“おひとりさま対談”である。

「正真正銘の独居高齢者」を自認する上野氏は、「妻も子どももいる」という山折氏を「ニセおひとりさま」とあやしみ、冒頭から牽制モード。「おひとりさま」として生きる女性に惜しみないエールを送る一方、漂泊の俳人らに憧れ、「家族はあてにしていない」とのたまい、「最後は野垂れ死にですよ」と自嘲してみせながら、孤高の人を気取る男性 (おっさん) に対しては、「絶対に実行しないくせに」と容赦ない。男性が「ひとり」を口にしながら、その実、家族をあてにし、妻に依存し、「ひとり」になるという現実の一切を「思考停止」しているだけではないかと指摘する。女性が「ひとり」で生きていくには、現実的な覚悟が必要。なのに、覚悟がない男性に限って「ひとり」を口にしたがる。そんな「ひとり」願望のおっさんに対し、「自分ひとりの身の廻りの始末さえできないくせに」と言い放ち、「おひとりさま」をめぐるジェンダーの非対称を俎上にのせる。

おっさんの「ひとり」願望は、単なる「現実逃避」「自己美化」であり、「いい気なもんだね」と一刀両断する上野氏に対し、山折氏は「トゲが･･･、そのトゲが･･･ (笑)」と、上野氏の“男性への刃”に苦笑い。「ひとり」が「願望的な意図」であることを認めながらも、「危機的な状況でどうにもこうにもならなくなったとき、唯一救ってくれるのは、妄想かもしれないんだよね」と、人の弱さを支える「ひとり」の意味を示そうとする。「二世 (あの世)」までもの夫婦のつながりは、たとえ「妄想」であっても、古来からの「人間関係の作法」であり、「ひとり」であろうとする願望を支えるものだという。

当然、こうした妄想は、「誰かと運命共同体になること」を一切望まない上野氏に根こそぎ否定されるわけだが、果たして「ひとり」とはいかなるものかと考えさせられる。夫婦という共同体が、妻の側からみれば「吸収合併」に過ぎず、つねに夫のケアを求められる不平等をはらむ以上、女性の「おひとりさま」宣言は、「脱・共同体」アクションにほかならない。そして、男性の「ひとり」願望が、そうした共同体への依存を前提とする以上、両者の“おひとりさま”論は永遠に交わらない。しかし、上野氏の「おひとりさま」が、女性同士の支え合いに根差したものであるように、ひとりで生きることは、だれかとのつながりや共同体抜きには成り立たない。夫婦関係において、「おひとりさま」として生きることが難しいのは、それが“男女”の関係だからではない。男女が“関係性”を築いていないからである。女性は男 (夫) の世話を放棄するために「おひとりさま」を目指し、男性は恭順な女 (妻) を妄想して「ひとり」を夢見る。“無関係”という男女の“関係性”が、「おひとりさま」シリーズのヒットを支えているといえるだろう。

文芸論、宗教学、死生観･･･と広がりをみせる対談のなかで、「最後はなんとなく、古狸にまるめこまれたような気もする」という上野氏の不全感で終わる対談の結末はいかに。“まるめこまれた”というより、山折氏の寛容なまなざしに“包まれていた”ようにもみえるが、きっと、そんな「共同体」は望んでいないと言われるだろうなぁ。

(大阪大学大学院准教授　野坂祐子)